中央大学社会科学研究所年報　第 24 号（2019）

〈査読論文〉

コミュニティ・リーダーの統合に対する「記憶」の作用
――東京都立川市の都営団地自治会役員層のネットワーク形成の検討を通じて――

大　谷　　晃*

Effects of “Memories” on the Integration of Community Leaders: Study of Officials of a Residents’ Association in Public Housing in Tachikawa, Tokyo

Otani Akira

What are the effects of “memories” on the integration of community leaders? This paper discusses this question through a case study of the public housing of “Tachikawa Danchi” in Tokyo, which was rebuilt in the late 1990s, causing a reorganization of the neighborhood association. To do so, I first reviewed previous works on community leadership in Japan（Okuda 1983, 1993; Ochi 1980, 1990a, 1990b）. We will see that these theories had prominent epistemological meanings, but they could not explain how to keep leaders in an urban community. Second, I explain this problem through a case study of “Tachikawa-danchi”; I mainly present arguments about leaders who moved into “Tachikawa-danchi” after rebuilding. Theoretical findings were obtained that are related to community leaders as “mediators of memories.”

キーワード：都市コミュニティ，記憶，リーダーシップ，統合，自治会，役員層，公営団地，立川

【目次】

1．問題の所在
2．先行研究の検討と本研究のアプローチ――コミュニティ・リーダー論と「記憶」論
3．事例の紹介――役員になる契機と新たな役員層におけるネットワークの形成
4．事例の分析と理論的検討
5．結　　論

2020 年 4 月 17 日査読審査終了
＊中央大学大学院文学研究科博士後期課程

1．問題の所在

現代の都市コミュニティの統合は，いかにして可能なのだろうか．いかにして，「異質なものの集まりにおいて位相的秩序のなかで調和を維持していく」（吉原 2011）ものとしてコミュニティを捉えることができるだろうか．

戦後日本の都市社会学・地域社会学の膨大な蓄積の中での都市コミュニティ論は，高度経済成長期以降の都市や郊外地域における「異質性」の増大という現実を前に，このテーマに取り組んできた．そこで主題化されてきたのが，コミュニティ・リーダーの問題，すなわちコミュニティの担い手の主体的条件の問題である．

しかし，現代におけるコミュニティの主体をめぐる問題は，都市化や都市的生活様式の進展，個人主義と共同体主義の対立だけでは読み解けない．東京一極集中や少子高齢化の進展に伴い，限界集落の登場や地域組織の衰退・崩壊が唱えられて久しい．さらに，東日本大震災以降は，新自由主義的な国家政策や資本による「選択と集中」のフィールドとなった地域社会の分断や，個人の原子化が進んでいる（浅野 2015：45-48）．一方では，町内会・自治会などの地域組織への加入率の低下傾向は止まらない．「場所と関係する帰属への希求」が高まる一方で，多くの場合それは「コミュナルな楽園を基礎にした単なる心地のよい幻想にすぎない」という危機をコミュニティは迎えている（Delanty 2003＝2006：272）．

本稿は，1990 年代半ばの建替えを契機として自治会改革・再編が行われてきた都営「立川団地（仮名）」での役員層の人々を事例に，コミュニティ・リーダーの統合，ネットワーク形成に対して「記憶」がいかに作用するのか，考察するものである．

筆者は，2012 年度より「立川団地」で行われてきた共同の調査研究[1] を出発点とし，その後の長期的な参与観察調査から，「都市コミュニティの自治と持続的な統合の条件」というテーマで研究を行ってきた．とりわけ，地域福祉やコミュニティ再生の「成功例」[2] とされる「立川団地」において，1990 年代半ばの建替えを契機とした団地自治会の改革と再編のプロセスが主な分析の対象となり，近著[3] ではこれを「集合的記憶」論の観点から論じた．

1）　本稿における筆者の立脚点は，「立川プロジェクト」（中央大学新原道信ゼミナールの教員・院生・学部生の有志によって立ち上げられた調査研究チーム）を出発点としている（大谷 2019）．「立川プロジェクト」については，（新原編 2019）も参照されたい．

2）「立川団地」は，1999 年より自治会長を 16 年間務めた女性 St さんのもとに，自治会加入率 100％（自治会費納入率ほぼ 100％），高齢者の見守り制度の確立による孤独死 0・交通事故 0，コミュニティ・ビジネスの確立などを成し遂げてきた（大谷 2019：280-285）．近年では NHK によって「ETV 特集『困った時はお互いさま～孤独死ゼロ・立川団地の挑戦～』」（2016 年 11 月 5 日放映），「ふるさとの希望を旅する―“無縁”から“創縁”へ　都市の地域づくり」（2016 年 11 月 23 日放映）が制作され，「立川団地」が紹介されている．自治会役員自身の著作としては，佐藤（2012）を参照．

3）　大谷晃，2020「『記憶』による都市コミュニティの統合―東京都立川市の都営団地の建替えと自治

本稿では，分析概念としての「集合的記憶」論の観点を引き継ぎつつ，残された実証的な問いに応えることで，コミュニティ・リーダー論に新たな知見を付け加えることを目的とする．本稿は，以下の構成をとる．まず，第2章では1970-80年代の都市コミュニティにおけるリーダーシップ論を，代表的な論者である奥田道大と越智昇の議論に沿って検討し，本稿の「記憶」論によるアプローチを提示する．次に，第3章では「立川団地」の事例を，とりわけ建替え後の自治会役員層のネットワーク形成，および統合における「記憶」の作用に着目して論じる．そして，第4章では「立川団地」の事例について，「記憶」論から理論的な検討を加える．最後に，第5章において結論と残された課題を述べる．

2．先行研究の検討と本研究のアプローチ
――コミュニティ・リーダー論と「記憶」論

本章では主要な先行研究として，1970-80年代の都市社会学・地域社会学におけるコミュニティ・リーダーの研究を牽引した奥田道大，越智昇の議論を批判的に検討した上で，「記憶」論に基づいた本稿のアプローチを提起することを目的とする．

2-1.　奥田道大のコミュニティ・リーダー論

まず，著名な「コミュニティ」モデル[4)]を提起した都市社会学者の奥田道大のリーダーシップ論を，2点の特徴から論じていく．

第1に，限定的なイッシューの「共通の自覚」と自由意志的なコミットメントによる「有限責任型リーダー」を重視していることである．とりわけ，初期の奥田のコミュニティ論にみられる立場である．奥田は，神戸市丸山地区や国立市歩道橋建設反対運動を通じて，「能動型（運動型）コミュニティ」を地域社会形成のキー・モデルとして措定し，地域生活の中での「当面の」イッシューに加え，「予測される」イッシューが人々の「共通の自覚」とされることを重要視した（奥田 1983：71-90）．その上で，「住民が自由意志的にコミットメントする特定の領域で，自らの個性や能力を多様に活かしうるかたち」としての「有限責任型リーダー」が運動を先導するとした（同書：74-75）．

第2に，「新しい価値の創造の〈運動〉志向」と「〈consummatory〉（自己充足的）な意味」や「パーソナリティ・個性の成熟」を重視する「コミュニティ・ビルダー型」リーダーへの展開である．1970年代から80年代のまちづくり・コミュニティ形成では，「住民の自己組織力」

会再編」．2020年5月刊行の『地域社会学会年報第32集』に所収．

4）　奥田は，八王子市調査から主体的―客体的（行動体系軸）と普遍的―個別的（価値体系軸）の4象限で地域集団の類型化を試みた．郊外の新中間階層に，流動的な「個我」（普遍的―客体的）モデルの住民意識と同時に，地域社会への定着性が高い「コミュニティ」（普遍的―主体的）モデルへ移行する可能性を見出した（奥田 1971）．

が重要視され，個々人の「パーソナリティ」や「個性」の「成熟」が，地域における運動の展開との結びつきで捉えられた（奥田 1993：137-142）．ここから，用具的（instrumental）なリーダーシップに対して，「新しい価値創造の〈運動〉指向と，実践のスタイルに内在する〈consummatory な意味〉への感覚を重視する」ものとして，「コミュニティ・ビルダー型」の人物をコミュニティ・リーダーの中心に据えた（奥田 1983：118）．

奥田のコミュニティ・リーダー論は，1960 年代の対抗的な住民運動から 1970 年代以降のまちづくり運動への移行という同時代的な現実から要請された理論であったと言える．

2-2. 越智昇のコミュニティ・リーダー論

このような奥田のリーダーシップ類型論に対して，都市社会学者の越智昇は次のように反論する．リーダーたちの「個性的人間像」は，必ずしも「理論化（一般化）」ができないのであり，コミュニティや社会運動の「与件」や M. ウェーバーの言うカリスマとして重視するのでは，社会学的思考の限界を意味する（越智 1990a：8-9）．このような問題設定を行った越智は，以下のように 2 つのコミュニティ・リーダー像を見出す．

第 1 に，「象徴的リーダー」論である．これは自治会役員などの制度的なリーダーとは異なり，「リーダーたちよりも多くの威信を，非リーダーたちから与えられて」いる人々である（越智 1980：358）．越智は，評価法による横浜市調査から，「象徴的リーダー」の大半は女性であり，（なぜ指名したのかの）「限定された『理由』をあげにく」く，「制度的な枠にこだわらない生活の論理に立つ活動」をしているという特徴を見出す（同書：361-362）．こうした知見の延長に，彼が後年に発表した「ボランタリー・アソシエーション」論がある（越智 1990b）．彼は，「分業的専門サービスになじまない個人的必要・共通した必要を自覚した人々が，自発的に連帯してその達成に向けての主体的，創造的な関係性としてのネットワーキング」（同書：260）を形成することが，「本来町内会がもっているはずの『親睦』『分担』という文化型のコミュニティ的再生を図る」（同書：277）ことにつながると指摘した．

第 2 に，「自己否定のうえに形成されるリーダーシップ」（越智 1990a：9）である．越智は，愛媛県余土村の森恒太郎という名望家層出身の人物が，視力を失い絶望する過程を経た後に，村人から請われ村長となり，未解放部落の人々，子どもたち，小作人たちなどの「弱者の論理」に立った村政を行う過程を描いた．これは盲人としての自らの存在価値を村政に見出すだけでなく，実際の村政に携わることを通じて「我が村の愛」を感じ，「自治」を見出していくという，「二つの自我の組みかえ」が同時に起こるプロセスであり，両者を統一的に成しうることこそ，コミュニティ・リーダーの「原型」として一般化できると述べた（同書：45-51）．ここから，コミュニティ・リーダーは，「自らの思想と行動を常に一住民の根元に，すなわち普遍的人間存在にまで掘り下げようと具体的に努力する社会的存在」であり，「その自己変革過程が，結

果的にフォロワーシップをつくりあげ」るものだとされた（ibid.: 51）.

2-3.　先行研究の問題点

ここから，奥田と越智の議論を批判的に検討し，本研究のアプローチを提起する.

まず，両者の方法論的共通点として，「構造分析」のアプローチから距離を取り，いわば可能態としてのコミュニティを裏付けるための，住民意識，文化，個人史の研究に焦点が置かれたことが指摘できる[5]．今まさに「生起しようとしているもの」あるいは「生起しようとしていたもの」を捉えようとしたことは，1970-80 年代のコミュニティ論の成果であった.

一方で，奥田と越智の理論は，各時代情況の中で現にコミュニティに生起しつつあるリーダーシップが，いかにしてコミュニティを統合しうるかについては，十分な説明を持たない．とりわけ問題となるのは，以下 2 点である.

第 1 に，「自発性」「自由意志」を重視したリーダーシップ論であること．例えば，奥田のリーダーシップ論は「自発性」「自由意志」，あるいは「自己充足」的なものを見出しているが，それは新規来住者層・新中間階層を中心とする市民運動に即した理論であることは否めなかった．この観点からは，「自発的」「能動的」な主体としての市民以外の主体が都市コミュニティにいかに統合されるのか，という点については十分に論じられてこなかった.

第 2 に，「原型」志向の色が強いリーダーシップ論であること．越智は，自発性に着目する点で奥田の視角と一定の共通点を持つが，町内会の「文化型」や自己の「否定」「変革」あるいは自我の「組みかえ」に，リーダーシップの「原型」をみる[6]．こうした視角があったからこそ，彼の豊富な実証研究と，1990 年代後半以降の地域社会学で主題化された「弱い主体」論[7] につながる提起が可能であった．一方で，彼の「原型」志向は，現実に生じている差異や分断を見落とすことになってしまう危険性をはらむ.

2-4.　本研究のアプローチ

本稿では，これらの問題に対して，「記憶」の概念を用いた議論を試みる.「記憶」の観点か

5）　例えば奥田は，都市社会学における意識研究の意義について，当時の主流であった構造分析と対比しつつ，「全体像としての都市社会の変容の一定の反映としてよりも，変容の意味なり方向への先行的指標」（奥田 1973：208）と見出している．こうした方法意識から意識研究の「主題」としての都市コミュニティ研究が始まるのである（同書：210-217）.

6）　越智の研究には，自身が述べるように「社会と人間についてのプロトタイプ（原型）」（越智 1990a：219）への志向が常にあった.

7）　1990 年代後半以降の地域社会学では，阪神淡路大震災の現実や，地域福祉への着目の高まりと共に，「〈弱さの存在〉―〈受動的主体〉からいかに〈受動的能動〉へと転生するか」（似田貝 2001：42），「コミュニティ形成が前提としていた『強い市民』という虚構が解体し，弱い市民の存在や市民の複数性といった事態が浮上してくる」（武川 2003：16）といった問題が主題化された.

らコミュニティ・リーダー論をみると，いかなる利点があるのか．

「記憶」は，都市コミュニティを統合する力を持つものとして注目に値する．拙稿（大谷 2020）では，「集合的記憶」論の観点から，「記憶」が都市コミュニティの統合にいかなる影響を与えるのかを論じた．その際，①「異質性を縮減し内的な統合をもたらすことを内在するコミュニティの理念」と結びつけられた「構築された記憶」と，②「実態としての社会関係の中で生き続け」ており「離脱の困難さを含めたコミュニティの持続性」に結びつく「実態としての記憶」を分析概念として立てた．その結果，2つの知見を得た．

第1に，「実態としての記憶」は，コミュニティの理念と結びつく形で「構築された記憶」になってこそ，都市コミュニティを内的に統合することである[8)]．R.M. マッキーヴァーの議論以来の実態としてのコミュニティ的な共同生活[9)] は，Z. バウマンが指摘したようにある種の幻想であり[10)]，現代では「構築された記憶」として理念化されることで統合に寄与する．

第2に，一方で「実態としての記憶」は，過去の社会関係や共通経験を直接共有する人々を拘束し，現在もネットワークの形で留めさせることに寄与している[11)]．とりわけ，自治会役員層のような小集団の統合においては，「記憶」が持つこの役割が重要である．

本稿では，この第2の点をより探求していくことを目的とする．確かに，コミュニティのリーダーたちは，特定の人々に共有される「実態としての記憶」から「構築された記憶」をつくりだし，維持しようとすることで，コミュニティ全体の統合を保とうとしている．そこには，都市コミュニティを統合するための「記憶」が構築される，政治力学が存在する．

しかし，それはなぜなのか．なぜ，都市コミュニティの統合を持続的にしていこうとする動きが生じるのか．「記憶」論の分野では，現在からみて過去が再構成・構築されたものとして扱う構築主義的な見方が強かったが，近年になってその問題点も提起されている（松浦 2005；金 2010）．「なぜ他ではありえない特定の過去が個人や集団を惹きつけ，集団による記憶の共有や集団間の記憶をめぐる対立を生み出すのか」という問いから，「過去の連続性」や「過去の実在性」を再評価する見方が登場している（金 2010：25-27）．ここでは，「記憶」が構築されるメ

8）「立川団地」の場合，St さんをはじめとする1980年代に子育てを経験した人々という極めて限定的なアクターの，建替え前の生活風景や社会関係に基づく「実態としての記憶」が，自治会広報紙などを通じて団地自治会全体の理念と結びつけられてきた．

9） R.M. マッキーヴァーの古典的な定義では，「コミュニティ」は単一の共同関心を体現する「アソシエーション」では充足されない，人々の「もっと重大な共同生活」そのものを指す（MacIver 1917＝1975: 47）．

10） Z. バウマンは，「コミュニティ」を「残念ながら目下手元にはないが，わたしたちがそこに住みたいと心から願い，また取り戻すことを望むような世界」と定義し，コミュニタリアン的幻想を批判している（Bauman 2000＝2008: 10）．

11）「立川団地」の場合，「実態としての記憶」を共有する過去の役員経験者たちが団地の行事に通い続け，現在も担い手になっている．

カニズムよりも，「記憶」の主体に対する「作用」の仕方がまず問題となり[12]，その上で主体がいかに「記憶」を捉えなおすのかという問題が立つことになる．

本稿は，以上のような見方を参考として，コミュニティの活動の担い手となるリーダーたちに対して「記憶」はいかに作用しているのか，自治会役員層の統合，およびネットワーク形成と関連して明らかにすることを目的とする．

2-5.　対象設定――都営「立川団地」の概要

高度経済成長期以降の都市社会学・地域社会学において，異質な人々の住み合う都市コミュニティの形成がいかにして可能かという観点から，団地は対象化されてきた[13]．この時期から30年以上が経過した1990年代半ば，1950-60年代につくられた団地は老朽化による建替えが相次いだ．これによって，定住の場として一定の地域社会が形成されつつあった団地において，建替え以前からの定住層であった住民たちと，新規来住者層となった住民たちとの間で，新たな形で旧住民―新住民問題が生じることとなったのである．さらには，2000年代以降，団地は「再生」「郷愁」の対象となっていく．住民の高齢化，人口の減少と空き家の増加，そして単身高齢者の「孤独死」が問題化されていくことになる．

本稿が事例とする「立川団地」は，東京都立川市砂川地域[14]に位置する都営住宅である．現在は，鉄筋コンクリート3階建てから14階建ての住宅棟計31棟に，約1400世帯3700人の人々が暮らす．敷地面積は約17万㎡であり，管理主体は東京都住宅供給公社である．

表-1に，造成当初から近年までの，「立川団地」の戸数・人口・年齢層・住宅構造・住民組織の変遷を年表で示した．「立川団地」にとって転機となったのは，1994年に打ち出された団地建替えプロジェクトであった．従来の木造平屋・2階建ての建物は，鉄筋コンクリートの高層住宅へと大きく変容し，1996年12月より順次再入居が開始された．また，建替え後の1997年には新たに「立川団地自治会」が設立され，先述の通り1999年から16年間自治会長を務めたStさんのもとに全国的な注目を集める自治会活動が行われていった．

12）　この見方として，松浦雄介による以下の問い立てが参考になる．「記憶」が「われわれの生にたいしてどのような働きを持っているか，われわれの経験や行為，アイデンティティ，身体などにどのような作用を及ぼすのか」（松浦 2005：32-33）．

13）　とりわけ1970年代以降の研究は，団地を新中間階級による住民運動・コミュニティ形成の地盤として着目していく（奥田 1971；北川ほか 1976；古城・守屋編 1984）．高度経済成長期がもたらした劇的な人の移動が，従来の地域共同体に代っていかなる地域的・市民的なつながりを生み出しうるのかという関心が，この時代の通奏低音であった．

14）　立川市は，東京都心から30-40km圏内の西郊に位置する面積24.38㎢の自治体である．世帯数は92,251，人口184,274人（2019年8月1日現在）．中世以来の柴崎村域とその周辺（立川地域）がJR立川駅周辺の中心市街地を形成し，近世新田開発による砂川村周辺（砂川地域）は住宅街を形成している．1963年の合併により現在の立川市が成立．

表-1 「立川団地」の変遷

年	戸数	人口	年齢層	住宅構造	住民組織
1963	1200	2700	若・中年世帯中心	木造平屋・2階	立川団地連合自治会
1994	500	1000	初期入居者の高齢化と建替えに伴う転出	木造平屋・2階	(解散)
1998	1220	3000	新たな若年層の流入	鉄筋コンクリート3-14階	立川団地自治会
2012	1400	3700	単身・高齢者の増加	鉄筋コンクリート3-14階	立川団地自治会

資料：筆者作成

2-6. 調査方法

本研究は，2012年度より筆者が行ってきた長期にわたる参与観察調査によって集められた，以下の3つの調査データにより成り立っている．

第1に，「立川団地」の年中行事・役員会におけるフィールドノーツである．これは，2012年度以降，「立川団地」の3つの年中行事に運営スタッフとして，また毎月の役員会にオブザーバーとして筆者が参加してきた中で記録してきたものである．本稿ではとりわけ，集合的な行事を通じて生起する語りや，建替え前後に役員になった人々の抽出に用いた．

第2に，自治会役員経験者への半構造化インタビュー調査である．これは，参与観察調査を通じて構造化された問いをもとに，自治会役員に対して役員になる経緯や活動に対する意識に関して，事実確認や追加調査として行ったものである．

第3に，自治会広報紙や自治会定期総会資料などのドキュメント調査である．これまでに，立川団地自治会事務所に保管されていた資料から，自治会広報紙は第51号（2004年12月）から第146号（2018年10月）まで，定期総会資料は1984年度から2018年度までをデータとして収集した．本稿では，主に歴代役員構成などの事実確認に用いている．

参与観察を基本とする本調査の限界は，筆者自身の活動により問題を構造化し問いを抽出してきた一方で，活動を共にした役員層に記述対象が偏っている点である[15]．

一方で，本調査から得られた記述的データは，これまで「制度上の」リーダーとしての側面に着目され，住民の代表性を担保するような立場に置かれがちであった役員層の人々を，1人の個人，あるいは小集団として描きなおす可能性を持つ．これは，戦後の都市社会学がコミュニティを所与の一枚岩としてみてきたという批判[16]に応えるために，内部にある差異性を担保

15） こうした参与観察による記述範囲の偏りに関する限界は，（大谷 2019）において詳述した．例えば，筆者が当日担っていた役割によって記述対象は変化し，また年度を経て運営の中心に携わるほどに役員層と活動を共にすることが多くなったという偏りがある．

16） 都市社会学者の西澤晃彦は，自身が行った「寄せ場」の調査から，「『地域』を過剰に独立させて論じつつ、『地域』への『住民』の同一化を過度に強調」（西澤 1996：58）すると，町内会・自治会論，コミュニティ論を批判した．

しつつ，統合の可能性を探る試みである．

3．事例の紹介――役員になる契機と新たな役員層における ネットワークの形成

本章では，コミュニティ・リーダーたちに対して「記憶」はいかに作用しているのかを明らかにするために，都営「立川団地」の事例を，自治会役員層の統合，およびネットワーク形成に着目して論じる．3-1 では，本稿における登場人物となる役員層を，属性や役割，歴代役員層の変遷から位置づける．3-2 では，建替え前の「実態としての記憶」を直接的に共有しない，建替え後に入居した人々が，いかにして声を掛けられ，いかにして役員になっていったのかを紹介する．3-3 では，「実態としての記憶」を「構築された記憶」へと読み替え統合に寄与した中心人物がいなくなった後の役員層において，いかなる新たなネットワークが形成されるのか，年中行事でなされた象徴的な語りから紹介する．

3-1.　本稿における登場人物と位置づけ

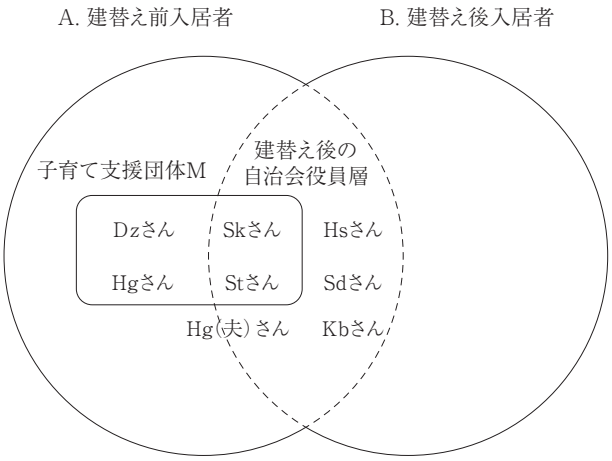
まず，本稿で述べる事例の登場人物は，表-２の通りである．また，登場人物たちを入居時期や役員経験に着目して位置づけると，図-１のようになる．ここでは，それぞれの人物がいかなる属性，社会関係の中にあったのかを整理した．

表-2　本稿における登場人物の属性

表記	入居時期・居住号棟	主な役員歴
St さん・女性	1976 年（建替え前），4 号棟在住	子育て・子ども関係団体を歴任，1999 年度から 2014 年度まで自治会長
Sk さん・女性	1981 年（建替え前），4 号棟在住	子育て・子ども関係団体を歴任，1999 年度から現在まで自治会会計
Dz さん・女性	建替え前，元 8 号棟在住，建替え後まもなく退去	子育て・子ども関係団体を歴任
Hg さん・女性	建替え前，7 号棟在住，故人	子育て・子ども関係団体を歴任，故人
Hg（夫）さん・男性	建替え前，7 号棟在住	2002 年度から現在まで自治会副会長
Kb さん・男性	1996 年（建替え後），元 8 号棟在住，2011 年に退去	1998 年度から 2010 年度まで自治会副会長
Hs さん・男性	1996 年（建替え後），7 号棟在住	2008 年度から 2014 年度まで自治会副会長，2015 年度から現在まで自治会長
Sd さん・男性	建替え後，20 号棟在住	2013 年度から 2015 年度まで自治会副会長

資料：筆者作成

図-1　本稿の事例における登場人物



資料：筆者作成

ここでは 2 つの特徴を挙げておく．第 1 に，St さん，Sk さん，Dz さん，Hg さんたち女性は，子ども会や PTA など子育て関係の「象徴的リーダー」である（あった）のに対して，Hg（夫）さん，Kb さん，Hs さん，Sd さんたち男性は役員になる契機が自治会活動にあり，初めから「制度的リーダー」になったことである[17]．第 2 に，女性は全員が建替え以前からの居住者であるのに対し，男性は Hg（夫）さんを除き全員が建替え後の入居者である．

さらに，上記の役員たちの就任・退任時期が明確になるように，1998 年度から 2015 年度までの内 10 年分を取り出す形で，表- 3 に一覧で示した．太字が本稿の登場人物，網掛けが行われているのは女性の役員であり，（ ）内に示したのは役員の居住号棟である[18]．

17）　本稿で論じる役員層は，自治会規約によって規定される「三役」（会長 1 名・副会長 5 名・会計 2 名）を指す．その役割は，「重要な会務の企画立案ならびにその業務を執行」することと規約に定められている．実際には，24 時間に生じる「立川団地」での日常的なトラブルへの対応，都住宅供給公社への取次ぎや市の事業などの窓口対応，年 3 回の年中行事の企画と運営，年間数十件以上に及ぶ行政機関や研究者の視察への対応，近隣の地域住民組織や学校の行事への来賓としての出席などがある．

18）　号棟を丸で囲ったものは，建替え以前の居住区の番号を示している．2000 年度までは建替え後の再入居が完了していなかったため，旧居住号棟の代表が選出されていた．

表-3　「立川団地自治会」における本部役員構成の変遷

役職＼年度	1998	1999	2000	2001	2002	2010	2011	2013	2014	2015
会長	Mn(4)	**St(4)**	**St(4)**	**St(4)**	**St(4)**	**St(4)**	**St(4)**	**St(4)**	**St(4)**	**Hs(7)**
副会長	**St(4)**	Wn(2)	Wn(2)	Wn(2)	Sz(3)	**Hs(7)**	**Hs(7)**	Iw(1)	Iw(1)	Iw(1)
副会長	Ot(3)	Sz(3)	Sz(3)	Sz(3)	**Hg(7)**	**Hg(7)**	**Hg(7)**	**Hg(7)**	**Hg(7)**	**Hg(7)**
副会長	**Kb(8)**	**Kb(8)**	**Kb(8)**	**Kb(8)**	**Kb(8)**	**Kb(8)**	Tr(14)	**Hs(7)**	**Hs(7)**	Iz(19)
副会長	It(⑫)	It(⑫)	Ss(20)	Ss(20)	Ss(20)	Yk(19B)	Yk(19B)	**Sd(21)**	**Sd(21)**	**Sd(21)**
副会長	Wt(⑫)	Ss(⑩)	欠員	Km(21)	Km(21)	Kr(25)	Kr(25)	Kr(25)	Tb(22)	Tb(22)
会計	Zg(6)	**Sk(4)**	**Sk(4)**	**Sk(4)**	**Sk(4)**	**Sk(4)**	**Sk(4)**	**Sk(4)**	**Sk(4)**	**Sk(4)**
会計	Kz(⑫)	Kz(⑫)	Kz(19)	Kz(19)	Kz(19)	Sg(24B)	Sg(24B)	Sg(24B)	Sg(24B)	Sg(24B)

資料：筆者作成[19]

表-3と関連して着目すべきことは，1998年度以降，Stさんらの働きかけによって行われた自治会役員の選考に対する改革である．従来までの会長による推薦・選出という形式から，「全世帯による投票形式」が導入されたのである．結果，①年齢層，②居住号棟・入居時期[20]，③性別ごとに平準化がなされたのである．例えば，1998年度の自治会役員は20代・30代・40代・50代・60代・70代が8名を構成しており，居住号棟・入居時期は一貫して各層から選出されており，女性役員も年々増加している[21]．このように，役員選出の基準は（少なくとも制度的には）「民主的」な改革が行われたわけであるが，後に実際の役員たちはいかなる契機で役員になっていったのだろうか．このことを次に論じる．

3-2.　建替え後に入居した人々が役員になる契機

次に，KbさんとHsさんという2人の人物の事例から，団地建替え後に入居した人々が役員になる契機を，建替え以前との比較を交えながらみていく．

3-2-1.「若い人やりなさい」という声掛け

Kbさんは，建替え直後に入居して間もない1998年から2010年まで，団地自治会の副会長を務めた人物である．2011年には団地外に転出しているが，現在も毎年のように団地の行事に通い続け，行事の運営においては仕事を総合的に把握し，経験の少ない団地住民以上に指示を出す実質的な「係代表」を務めている（制度上は1人の「協力員」[22]にすぎない）．

19）「立川団地自治会定期総会」資料，「立川団地だより（自治会広報紙）」より筆者作成．

20）「立川団地」においては，建替え後3回に分けて入居が行われており，建替え以前からの入居者が第Ⅰ期入居が行われた1-13号棟に多く，第Ⅱ期・第Ⅲ期入居者が多い14-26号棟には建替え後入居者が多い．

21）　表中に記載しきれていないが，2016年度以降の男女比は1：1（各4名）となっている．

22）　自治会規約上に明記されていないが，行事の運営に向けて各区から立候補・推薦された人々，およ

彼が役員になったのは，建替え後の入居間もない20代の頃であった．その契機は，自身の居住区である8号棟で，「子育て支援団体M」の中核メンバーの1人であったDzさんに役員をやるように進言を受けていたからではないかと，Kbさんと共に役員を経験し，Dzさんと子育てを共にしたSkさんは，次のように想起して語った[23]．

> いつもの調子で，「あんたやりなさいよ」ってDzさんから言われたんだよ，きっと．「なんでも手伝うから，若い人やりなさい」ってね．

さらに，こうした経験は，建替え前の1980年に入居したSkさんの時代からあったことが伺える．6軒長屋に入居したSkさんは，直後の挨拶回りで，「嫌な予感」を感じたという．なぜなら，隣の世帯が自治会の「班長」をしており，それが持ち回りだと聞いたからであった．その「予感」の通り，1982年にはSkさんが当時所属していた「第3自治会」の「班長」が回ってきた．出席した自治会の総会で，当時30代前半であったSkさんは，「若い人は体育（部）をやるのよ」と言われて，引き受けることになった．体育部を実際にやってみると，種目ごとにあるスポーツ大会とその後の宴会の運営を行う「大変」な部であった．

その後，2人の子どもの成長につれて，幼稚園の役員，PTA，子ども会，中学の学年部を引き受けていく．子ども会の役員決めに出席した際には，「（小学校）2年生の親がやるということらしい」と聞かされた．他の同級生の親たちの事情を考慮すると，「消去法で私しかいない」ということで決まったとのことであった．

3-2-2.「引っ越してしまったから」

Hsさんは，1996年12月に入居して，2002年から7号棟の区長，2006年からは駐車場管理部長，2008年から自治会副会長，2015年から現在まで自治会会長を歴任した．彼は，1970年代半ばに「いすゞ自動車藤沢工場」に入社するため，福島県田村市から引っ越してきた．その地で十数年を過ごし，配偶者の家業だった左官の仕事の手伝いを経て，立川市で工務店を営んでいた叔父の手伝いをするため，建替え後の「立川団地」に入居した．

入居後数年間は，直接自治会役員を務めることはなかったが，2002年に7号棟の区長となる．7号棟には建替え前からの住民も多く，Hsさんがコミュニケーションを取ろうと親睦の機会を企画していた．その際，「7号棟のボス」のような立場であるHgさんが，「新しい区長がバー

び団地外の諸団体の人々（元役員，子ども会，「中大生」など）である．

23）「子育て支援団体M」は，建替え後に相次いで起きた子どもの虐待・非行事件を契機として，Stさん・Skさん・Hgさん・Dzさんら24名の女性で1999年に結成された団体である．DzさんとSkさんは，同学年の子どもを団地で育て，中学校の「学年部」を共にして以来の関係である．そしてDzさんもまた，既に団地外に転出しているが，今も「子育て支援団体M」のメンバーとして団地行事などの手伝いに通う．

ベキューやるっていうからみんな協力しろ」と呼び掛けたという．Hg さんは，制度的な自治会の役員ではなく，St さん・Sk さん・Dz さんらと子育て関係団体で活動をしてきた人物である．しかし，インフォーマルな関係の中では発言力を持っていた[24]．

Hs さんはその後，「前の人が引っ越してしまったため（やる人がいなくなり）」，2004 年から駐車場管理部に入り，その後部長も務める．2006 年には，業者委託となったことで駐車場管理部は解散し，「良かった，辞められる」と思った Hs さんであったが，すぐに自治会副会長となる．St さんや Sk さんと共に自治会役員を務め，St さんが引退してから現在までは自治会長を務めている．「本当に蛇に睨まれたようなものだ」と Hs さんは振り返る．

Hs さんは，自治会役員として St さんと活動を共にした頃の経験を「結構（St さんに）怒られましたよ」と話した．自治会活動をめぐって意見対立もある中で，自治会というのは「人を育てる」「人を人にする」ものであり，そのためには「コミュニケーション」が必要だと St さんに説かれたという．「外にも顔を売れ」ということで，砂川地域の諸団体の役員も引き受け，それが現在の自治会長の仕事にも通じている．

また Hs さんは「いすゞ自動車」勤務時代，労働組合の青年部長を務めていた経験があった．「村でいうところの青年団」のような活動だったという．「大人の世界では St さんが教えてくれつつ，昔の経験が活きてきたのかなと自分では思っています」と Hs さんは語った．

3-3.　建替え後に入居した新たな役員層の形成――「晴れ女」不在の行事

「立川団地」の年中行事では，「晴れ女」という言葉を繰り返し耳にする．「晴れ女」である St さんがいると，行事当日の予報や前日の天候などにかかわらず，当日はなぜか晴れるため行事が開催できるのだという．「晴れ女」の語りについては，筆者が初めて参加した 2012 年から翌 2013 年の「立川団地運動会」で，繰り返し団地内の人々から話された．また，St さん自身も，「今日は雨の予報だったんですけど，本当によく晴れました．私が来ると晴れるんです」と挨拶をし，2013 年度の運動会に集まった運営スタッフたちの笑いをとった．さらに，それは来賓の挨拶に来る市長も共有しているほどのものとなっていた[25]．

24）　故人であるため筆者は直接会ったことがないが，Sk さんによれば「結構力のある人」であり，「とっても面倒見のいい人」であった．象徴的なものとして，「自分か子どもが立川団地小学校出身」が加入条件であった「子育て支援団体 M」に，「惜しみなく手伝いに来てくれたし，もうあの人は入れてもいいんじゃないか」との Hg さんの「一言」で，団地外居住の女性がメンバーになったというエピソードがある．

25）　例えば，2015 年 6 月 14 日の第 14 回「立川団地運動会」では，前日に雨の予報が出ていて，実際に当日も時折小雨が降る天候であった．その際の開会式での挨拶にて，St 会長時代から務める市長からは「ドキドキしていたのですが，スマートフォンで確認して確信しました．やはり『立川団地』の運動会は晴れになる」という挨拶があった一方で，都議会新人の議員は「微妙な天気となり」という話し出しであった．

では，団地の人々はStさんを「晴れ女」として語ることに，いかなる意味づけをしているのか．当時副会長であったSdさん[26]は，「みんながみんな決められないんだから，決断する人がね．だから毎回イベント（行事）やっても雨が降らねえんだよ」[27]だと言う．この際には，「決断する」力を持つ人物であるStさんがいることで，「雨が降らねえ」という意味づけがなされていた．「晴れ女」は，「決断力」といったStさんの個人的なリーダーシップの資質と同時に，集合的な行事の肯定に結び付けられている．

では，「晴れ女」であるStさんが自治会長を引退した2015年以降は，どうか．Hsさんが会長となった新体制の下での3つの年中行事は，中止には至らなかったものの雨の中での開催となり，例年とは異なる運営体制で進めざるを得なかった．この年最後の年中行事である「防災ウォークラリー」も同様であり，運営の混乱も生じたが，「雨でも関係なく災害はやってくるんだから」という言葉と共に，350名の人が集まったのであった．

前述のSdさんは，「雨だけどよお，もうこれ以上悪くなることはねえと思えばいいじゃねえか，なあ！」と言った．ここでは，「決断力のあるStさんがいるから晴れる」という図式が喪失したこと以上に，「雨だけど」「これ以上悪くなることはねえ」と，雨天を肯定する語りがなされていることに着目したい．共通するのは，晴天であろうと雨天であろうと，集合的な行事の肯定に結び付けられていることである．

会長になって1年目の2015年，Hsさんは前会長であるStさんと「同じことはできないけれど」ということを，自治会の総会や反省会の挨拶で繰り返し語った[28]．上述した防災ウォークラリー，1年の年中行事の締めくくりでもある．Hsさんはその場でも，「本当に，みなさんのおかげで1年間終われました．前会長のStさんと同じことはできませんが，昨日の夜，どうやったらうまくいくかって，寝ながら考えてました．ありがとうございました．また年末の清掃やパトロール等ありますので，お願いします」[29]と挨拶をした．年度初めの挨拶と異なるのは，雨天でも1年間の行事を終えたということであった．

26） Sdさんは，Hsさんらと同様に，建替え後に入居した住民であり，2013年度から2015年度まで自治会副会長を務めた人物である．「『今まではどう』とか言ってたら新しい人が入れないじゃないか」と，「新住民」の意見を代弁することがしばしばある．

27） 2015年の「夏まつり」に向けた準備を終えて団地近隣の焼き鳥屋での会話の最中，自治会役員たちの会話の中で「将軍」なる人物が話題となった．Sdさんは，ここで言う「将軍」がStさんであることを，「あの人前にすると何にも言うことなんかできねえ」と言いつつ，私たちに紹介してくれた（2015年8月9日 筆者のフィールドノーツより）．

28） 例えば年度初めの総会では，「前会長以上のことはできませんが，（指でつまむような仕草をしながら）ほんの100分の1くらいのことしかできませんが．昼間は仕事がありますので，何かありましたらここにいるSdさんとHg（夫）さんが対応してくれます．よろしくお願いします」とHsさんは話した（2015年4月19日 筆者のフィールドノーツより）．

29） 2015年11月8日 筆者のフィールドノーツより．

4．事例の分析と理論的検討

4-1.　先行研究との関連

本稿は，都市コミュニティのリーダーたちの統合，ネットワーク形成に対して「記憶」がいかに作用するのか，都営「立川団地」の役員層の事例から論じてきた．ここではまず，奥田道大と越智昇の先行研究から，「立川団地」の事例を説明しえない点を明らかにする．

第１に，建替え後に入居した人々が役員になる契機を，奥田と越智の議論からは十分に説明できない．奥田の議論に即せば，Hs さんの語る St さんという「コミュニティ・ビルダー型」のリーダーとの活動の中での学びは「パーソナリティの成熟」として読めるだろう．一方で，Hs さん，Kb さんの事例にみられるような，「若い人やりなさい」「前の人が引っ越したから（やる人がいない）」という受動的な契機は，十分に説明できない．越智の議論からは，こうした受動的な契機を，建替え以前の St さんや Sk さんの時代から続く「文化の型」として一定の説明が可能である．しかし，ではなぜ，建替え前の共通経験を共有しない Hs さんや Kb さんが，Sk さんらと類似の契機で役員となったのかを十分に説明しえない．

第２に，建替え後に入居した人々の新たな役員層における新たなネットワークの形成のありようを，両者の議論は十分に説明しえない．越智の議論からは，Hs さんが「同じことはできないけれど」と論じることは，St さんというカリスマ的リーダーとの対比から自己や自治会の局面を捉えた上での自我の「組みかえ」とも読める一方で，これもまたコミュニティ・リーダーの「原型」ということになる．今後の Hs さんのリーダーシップに基づく新たな役員層のネットワークがいかに形成されうるか，十分に考察できない．

4-2.　都市コミュニティにおけるリーダーシップと「記憶」

では，奥田や越智の議論で十分に捉えられない点を，いかにして論じることができるか．「立川団地」では，St さん・Sk さん・Hg さん・Dz さんらの，建替え前の共同生活（「実態としての記憶（A）」）が，St さんによって団地自治会全体に共有されうる理念（「構築された記憶（A）」）として広げられていった．以下では，本稿でみてきた建替え後に入居し，役員となった人々の事例を「記憶」論に位置づけ直すことで，３つの知見を論じていく．

第１に，建替え後に入居した人々が役員になる契機は，いかに説明しうるか．Hs さんや Kb さんたち，建替え後に入居し，「実態としての記憶（A）」を共有していなかったが，なぜ役員を引き受けたのか．彼らは，制度上は自治会改革後，選挙によって選出された役員である．しかし，それ以前の契機として，Kb さんの場合，Dz さんを通じて「若い人やりなさい」という建替え以前から続く声掛けから副会長となり，Hs さんもまた７号棟の区長になることで Hg さんとの間で同じような経験をし，後に自治会長になった．すなわち，Dz さんや Hg さんのよう

な「象徴的リーダー」が，インフォーマルな領域での声掛けや共同生活によって「実態としての記憶（A）」と同様の体験をKbさんやHsさんに提供したことで，KbさんやHsさんら新たな役員の担い手を統合することが可能になったのである．これは，DzさんやHgさんたちの「記憶」の「構築」というよりも，「実態としての記憶（A）」が彼女らの共同行為のレベルに「作用」したのだと言える．

第2に，Hsさんの場合，「いすゞ自動車」勤務時代の労働組合青年部での「実態としての記憶（B）」を，StさんやSkさんたちの「実態としての記憶（A）」と共鳴する体験として意味づけることで，自治会活動に馴染んでいったのだと言える．ここからは，「構築された記憶（A）」がつくりだされるプロセスが，双方向的であったことが明らかになる．

第3に，建替え後に入居し役員層になった人々の新たなネットワーク形成，リーダーシップのありようを，いかに説明しうるか．改革を担ったStさんというリーダーの不在後，Hsさんが発した「同じことはできないけれど」という言葉もまた，Stさんの強いリーダーシップとの対比で，人々を引き留める．これはStさんの「構築された記憶（A）」がまだ健在であることを，同時に示す．しかし，Hsさんが自治会長となり活動が行われていくことで，そこに集まった人々で新たな「実態としての記憶（C）」が生まれていく．Sdさんの語りのように，そこには新たなリーダーシップを表す「構築された記憶（B）」がつくられる萌芽も見出せる．Stさんの不在，「雨」の中の行事も，その源泉になりうるのである．

5．結　　論

本稿では，コミュニティ・リーダーの統合，ネットワーク形成に対して「記憶」がいかに作用したのか，とりわけ建替え後の「立川団地」の役員層の統合，新たなネットワーク形成に焦点を当てて論じてきた．本稿の理論的結論は，以下3点にまとめられる．

第1に，「実態としての記憶（A）」は，それを共有する人々の行為に作用する．そして，「実態としての記憶（A）」を直接共有しない人々も，共有する人々との相互行為・共同行為によって，同様の共同生活を体験（追体験）することが可能となる．

第2に，「構築された記憶（A）」は「実態としての記憶（A）」をもとにし，別様のコミュナルな体験である「実態としての記憶（B）」を持つ人々を共鳴させる．しかし，それは一方的な「構築」や「取り込み」ではなく，双方向的な意味づけのプロセスを生み出す．

第3に，「構築された記憶（A）」に共鳴して集まった人々は，「実態としての記憶（A）・（B）」に基づいた活動に参加し，その中でまた別様の「実態としての記憶（C）」を新たにつくる．こうした新たな共同行為が，「構築された記憶（B）」がつくりだされる契機となる．

以上の知見を，都市コミュニティの統合を可能にするリーダーシップというテーマに即して仮説的に言えば，「『記憶』の媒介者」であるということである．この主体は，必ずしも能動的

ではない．他者との共同行為において，上述の「記憶」の「作用」によって，作為的な「構築」ではなく，半ば無作為に伝達することが，1つの重要な条件ではないであろうか．

最後に本稿に残された課題を2点述べる．

第1に，「記憶」の実在性をどこまで認めるかという理論的課題が残される．本稿では，「記憶」が構築物であるという立場を認めつつも，過去の実在性に基づく議論を行ってきた．今後は，この実証主義に構築主義が対抗して以来の課題を，都市コミュニティ論と「記憶」論に加え，歴史社会学や民衆史の分野での知見を交え，より考察していく必要がある．

第2に，事例のレベルでは，統合の対象を「立川団地」の中のどこまで論じることが可能か，という点である．本稿では，役員層以外の一般住民は取り上げられていない．また，「記憶」による役員層の統合が強ければ強いほど，「記憶」を共有しない（共同行為に参加しない・できない）一般住民との間の隔絶は深くなる．当面の間は役員層が担い手として機能したとしても，その後いかに引き継がれていくのかという問題を捉えることが課題となる．

参考文献

浅野慎一，2015「東日本大震災が突きつける問いを受けて―国土のグランドデザインと『生活圏としての地域社会』」『地域社会学会年報』27，45-59.

Bauman, Zygmunt, 2001, *Community. Seeking Safety in an Insecure World*, Cambridge: Polity.（奥井智之訳，2008『コミュニティ―安全と自由の戦場』筑摩書房.）

Delanty, Gerard, 2003, *Community,* Routledge.（＝2006，山之内靖訳『コミュニティ―グローバル化と社会理論の変容』NTT 出版.）

古城利明・守屋孝彦編，1984『地域社会と政治文化―市民自治をめぐる自治体と住民』有信堂高文社.

金瑛，2010「アルヴァックスの集合的記憶論における過去の実在性」東京大学文学部社会学研究室『ソシオロゴス』34，25-42.

北川隆吉・坂幸夫・横倉節夫，1976「社会構造の変化と住民意識の動向―立川市調査報告書Ⅱ―」法政大学社会学部学会『社会労働研究』23(1)，145-207.

MacIver, Robert Morrison, 1917, *COMMUNITY: A Sociological Study; Being an Attempt to Set Out the Nature and Fundamental Laws of Social Life*, New York: Macmillan and Co..（中久郎・松本通晴監訳，1975『コミュニティ』ミネルヴァ書房.）

松浦雄介，2005『記憶の不確定性―社会学的探究』東信堂.

新原道信編，2019『“臨場・臨床の智”の工房―国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部.

西澤晃彦，1996「『地域』という神話―都市社会学者は何を見ないのか？」日本社会学会編『社会学評論』47(1)，47-62.

似田貝香門，2001「市民の複数性―今日の生をめぐる〈主体性〉と〈公共性〉」地域社会学会編『地域社会学会年報』13，38-56.

越智昇，1980「町内会の組織分析」蓮見音彦・奥田道大編『地域社会論』有斐閣大学双書.

―――，1990a『社会形成と人間―社会学的考察』青娥書房.

―――，1990b「ボランタリー・アソシエーションと町内会の文化変容」倉沢進・秋元律郎編『町内会と地域集団』ミネルヴァ書房，240-287.

奥田道大，1971「コミュニティ形成の論理と住民意識」磯村英一・鵜飼信成・川野重任編『都市形成の論理と住民』東京大学出版会，135-177.

———，1973「社会的性格と市民意識」倉沢進編『社会学講座 5 都市社会学』東京大学出版会，197-219.

———，1983『都市コミュニティの理論』東京大学出版会.

———，1993『都市と地域の文脈を求めて―21 世紀システムとしての都市社会学』有信堂高文社.

大谷晃，2019「立川プロジェクトの展開―立川団地での『問い』の深化」新原道信編『“臨場・臨床の智”の工房―国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部，275-323.

———，2020「『記憶』による都市コミュニティの統合―東京都立川市の都営団地の建替えと自治会再編」（2020 年 5 月刊行の『地域社会学会年報第 32 集』所収）.

佐藤良子，2012『命を守る東京都立川市の自治会』廣済堂出版.

武川正吾，2003「グローカリティと公共性の転換―コミュニティ形成から地域福祉へ」地域社会学会編『地域社会学会年報』15，1-19.

吉原直樹，2011『コミュニティ・スタディーズ―災害と復興，無縁化，ポスト成長の中で、新たな共生社会を展望する』作品社.